

開催報告書

市民の中でホスピスのことを語ろう

柏木哲夫・内藤いづみ「いのちの対話」ふたたび

日時：平成22（2010）年8月1日（日）午後1時半～4時半

会場：伊勢市 神宮会館 大講堂

この市民講座は、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による
申請者 遠藤太二郎（いせ在宅医療クリニック）
三重県伊勢市御園町高向927 提出 2010年9月29日



感動の出発点とは

施設ホスピスを日本に根付かせて、なお深い課題を追求されておられる柏木哲夫先生と、在宅ホスピス活動を粘り強く伝え続けておられる内藤いづみ先生の対談が、「いのちについて語りたい」というタイトルで、昨年11月の名古屋（日本死の臨床研究会）でありました。昼の1時間という短いセミナーで白熱して語られ、お二人は医療者に求められる姿勢を「生命からいのちへ」という言葉に集約してまとめられました。柏木先生は、言われます。現代のホスピス運動は、「やりすぎの医療」への反省から生まれ、延命中心の医療から苦痛の緩和中心のケアへの転換を目指した。生命重視からいのち重視への転換と言ってもいい。しかし今一番気になっている問題は「ホスピス、緩和ケアの医学化」と思う。ホスピスケアが包含している広い領域のうち、医学的＝生命の部分が強調されすぎている帰来があり、ホスピスや緩和ケア病棟が病院の診療科の一つと化している。私が1979年に渡英してホスピスで受けた感動は、医学的な感動ではなく、人間的な感動だった。そのホスピス運動は決して入院だけではな

なかった、とのこと。内藤先生も、1980年代後半に渡英し、市民運動としての現代ホスピスの誕生

と発展に直に触れ、医師として目から鱗が落ちた経験をされました。医療に預けっぱなしだった自分のいのちを自分に取り戻す道だと確信され、日本に戻って、医療制度もまだ整わず、社会的理解も乏しい在宅の場から、「在宅ホスピスケア」こそが自分の立つ場所だとして、困難の中も実践を続けてこられました。先輩の柏木先生は、内藤先生の感性の素晴らしさと、感動を行動に移し続けた、「行動力」に敬意を表すると、その対談の時の感想を言われます。

お二人の現場からの物語の、生き生きした対話は、セミナー会場に居た聴衆すべてを高揚させました。両先生が言われるように、本来のホスピスケアは、人間対人間として平等の視点で患者のいのちに向きあい、そのいのちの自立をサポートすることだと、会場の誰もが感じました。ホスピス、緩和ケアはシステムだけではないと胸に刻んで、会場を後にした人は多かったと思われます。

当日の司会役・スタッフも会場の雰囲気とセミナーの意義を共有しました。ぜひこの対話の続きをと期待する気持は、次に「終わりよければ」いせの会に引き継がれました。

「終わりよければ」いせの会の活動とは

「終わりよければ」いせの会は、羽田澄子監督のドキュメンタリー映画「終わりよければすべてよし」の地域での自主上映活動を契機に、2008年3月に立ち上がりました。誰にでも訪れる死をめぐる問題を率直に話し合い、住み慣れた地域で最期まで過ごそうと実現を目指しています。ほぼ毎月の市民懇談会を活動の柱にして、最初の年は「最期まで口から食べるためのシンポ」を運営しました。翌年は自前のエンディングノートを作る活動に1年をかけました。

人口13万、高齢化率25%の伊勢市では、人生の最期をどこで誰と過ごすかが、これから直面化する大きな問題になると思われます。現在でも、病院や施設での死亡は8割に達し、高齢者の老老介護など、生活上の孤立化は深まる一方です。救急医療体制も、三重県他地域からの崩壊が及びつつあり、介護の社会資源も不足したままです。2年後に移転する地域基幹病院に緩和ケア病棟20床が開設される予定がありますが、地域に根付くホスピス活動が無ければ、ただの収容施設に化してしまうおそれもあります。

地域住民が、自らの「終わりよければ」として、緩和ケア病棟の役割や在宅ホスピス活動を理解して、自らの行動も変える努力をしなければならぬ時期に来ていると、私たちは思っていました。

伊勢での「ふたたび」の意味

そのような時に、柏木先生と内藤先生の対談を主催しませんかとの提起があり、身近で、ホスピス本来の活動と普段の生活はこのように関連しているのだと、再び聴けるまたとない機会だと思われ、お引き受けすることになりました。多忙なお二人のご都合が偶然整った8月1日に、この対談を企画運営することを、伊勢市民がホスピス活動を進める大切な出発点にしようと思いました。

さらにこの伊勢の地ならではの「ふたたび」の意味を、奇しくも神宮会館館長

の宮川さまが、歓迎挨拶の中で自然に触れられていましたので引用します。

「本日8月1日は八朔と申し、この内宮界限も非常に賑わっている時節です。朔とは新月、月の初めということですが、旧暦では9月8日、早稲の穂が付き始めて台風の多い時期を迎え、あらかじめ豊作に感謝する予祝の時期でもあります。この日、内宮では霊力を持つ水へ感謝しこれからの無病息災を祈って五十鈴川のほとりの滝祭の神さまの所で水を汲む行事がございます。

これらの行事が連綿と受け継がれている事実は、繰り返すことにより、その思い・命・心が受け継がれているということを示します。まもなく62回を迎える式年遷宮も、繰り返すということが大切なことです。遷宮が始まる1300年前には建物をもたせる技術が当然あったわけですが、20年に一度建て替えるという道を選んだのは、変わることによって、変わらない永遠の命が神とともにいて、お蔭を得て、守られている、その思いを繋げてゆきたかったのではないかと思います。しかも20年という間隔は、現代でこそ短いと思われませんが、40代で亡くなるのが普通の寿命の時代では、引き継ぐためにはここまでと言う大きな意味を持つ数字です。

命の永遠性、心の永遠性を、こういう形で大事にしてきた日本の心を思い返してみると、本日は大切ないのち、そしてここに触れてお話をいただくまたとない機会です。生きるということと共に学ぶ機会として、当会場をお使い頂くことに心より感謝と共に、歓迎のご挨拶とさせていただきます」

前泊研修のご報告

伊勢でこの時期の開催という御縁を生かして、前日からの宿泊研修をオプションで設けることにしました。参加者は、全国と地元三重県ほぼ半々の割合で40名が集まりました。柏木先生にも1日前からのご足労をいただき、研修でのご講演「死を背負って生きる」を、まず拝聴することにしました。



「人生を生きるとは、その意味を考えながら死を視野に入れて生きることだと実感します。生と死は距離をとれるものではなく、実際は死を背負いつつ生きる、距離のとれないものなのです。死を前にして、人はそれまで生きてきたと同じ態度をとりますが、まれには人生の振り返りから、思わぬ跳躍をする人もいます。逆に

凋落する例の大半は痛みのコントロールがうまくいかなかったりすることによる医療者の責任です。ただ、死後の世界は存在すると思うか？という問いに対して「わからない」との答えが多数であるのは日本人に特徴的です。人として

生まれたことは、魂を持った存在として生まれる事です。WHOの定義が変わったように、人は、個人の存在としては身体・精神・魂（スピリチュアリティ）、そして社会的存在で成り立っており、全人的な痛みはこのそれぞれが苦しむ所から来ているのを、思い起こす必要があります」（この要約の文責は当会）

希望者には五十鈴川での禊（みそぎ）体験、早朝の内宮参拝、生きている感謝の意味での神楽奉納など、沢山の経験をさせていただきました。夜遅くまでの懇親会を含め、御配慮いただきました会場の修養団さまには御礼申し上げます。

8月1日市民公開講座のご報告

当日のタイムスケジュール

13：30～13：35（5分）	開会の挨拶・参加者への各種案内
13：35～13：40（5分）	神宮会館館長からのご挨拶
13：40～14：10（30分）	柏木先生のミニ講演
14：10～14：40（30分）	内藤先生のミニ講演
14：40～14：55（15分）	休憩
14：55～15：45（50分）	対談（いのちの対話）
15：45～16：15（30分）	Q&A（記載の質問・疑問への答え）
16：15～16：25（10分）	両先生のまとめの発言（感想など）
16：25～16：30（5分）	閉会の挨拶

当日は猛暑のさなか、冷房が充分効かなかったような、参加者の熱気でした。チケット集約での参加数は、約380名、会場の雰囲気はそれ以上のものでした。終了時のアンケート回収は250枚でした。（集計や感想は別紙）

対談に先立つ各30分のミニ講演の要旨を紹介します。（要約の文責は当会）

柏木先生は、1979年に渡英してシシリーソンドース博士との出会いの歴史から、ホスピスの意味を述べられました。ホスピスの語源は「親切にもてなす」という意味だが、その同じ語源から派生した「ホスピタル＝病院」は不親切になっている現状は今も昔も同じです。そんな中で、建物も優しい設計で、「聞くよりさらに心をこめて聴く」ホスピスが運動として作られてきた経過を示されました。精神科医である柏木先生は、まず身体の苦痛を先んじて和らげる必要を、博士からの教えとして受け取られ、帰国後に内科研修を3年積み上げられてホスピス開設に進まれました。痛みは全人的にとらえる事も教えられ、身体・精神・魂（スピリチュアリティ）、そして社会的存在に関係する痛みであると示されます。ただ、今の日本のホスピス緩和ケアは、身体の痛みだけ取れば何とかなると偏っていないかと危惧されます。

内藤先生は、「縁（えにし）を結ぶケア」と在宅ホスピス活動を紹介されました。臓器を相手に「治せなくてすみません」とそれで別れる医療と、見送った後にも色々な所で人生の関わりがつながる在宅ホスピスケアは、対照的だと示されました。今の日本のように安心して子供を産めない社会は、安心して一生を終えられない社会です。英国で、安心して励まされ助産師さんに子供二人の出産を任せたとご経験は、安心して見送っていいんだよというホスピス運動と重なります。在宅ホスピスでは、一人一人の患者さんの願いに沿ってその安心をつないでゆく実例を、難病で一人暮らしの老女の花を育てる生活を提示されました。不思議な事ですが、もう一人の在宅癌患者さんがその花をお世話していた花屋さんであることがわかります。互いの物語が繋がっていることを確認できる在宅医としての縁を、内藤先生は深く感じておられます。また、いのちのつながりは、宇宙や時空を超えたつながりの一部だと強く示唆されました。

対談の概要



お二人自身も、英国のホスピスを体験するという共通点がありながら、昨年11月まで接点が少なく、それゆえ今回の対談（ふたたび）も楽しみにされていたとのことでした。

お話は、患者さんの「にもかかわらず微笑む」ユーモアの話から始まりました。病院では入院と同時に、強弱関係がどうしても自然に発生します。川柳や会話などでユーモアが通じる関係は、そのまま相手を気遣う平等な双方向の人間関係の起点です。一方で在宅の場合は、患者さんのホームグラウンドでもあ

るだけに、自然に平等に移行しやすいが、医療者にも適応の能力が求められる場でもあります。柏木先生から最近のがん治療では、抗がん剤が効果的かつ楽に受けられるようになったため、過度の期待へ引っ張られて、命のぎりぎりまで死を考えようとせず、緩和ケアへの移行と気持ちの受け容れが逆に難しくなっている例もあげられました。内藤先生からは在宅ホスピスケアの中での本音の会話を集めて「かるた」のように整理している試みも紹介されました。共に述べられた経験の中には、患者さんが慰めの言葉を準備して治療者をいたわることもあるという状況です。最期まで食べようとするのが、生きる事の大事な場面と紹介され、それを助けるのもホスピス活動とのお話も尽きませんでした。（対談集の刊行の予定があり、一部のみ紹介の形です）

対談の終了時に、参加されていた伊勢市長と山田赤十字病院院長に、感想とご挨拶をお願いしました。このために時間切れで柏木先生にお聞きできなかった、「あと2点」のご発言要旨を、後日お訊ねしましたので以下にお示しします。

まず第一点は、シシリーソングラスさんの言葉 I did not found hospice, hospice found me. （私がホスピスを創ったわけではありません。ホスピスが私を見出してくれたのです）2005年の彼女の逝去時、その深い意味を再認識されたとのことでした。

第二点は、医療・看護・福祉と宗教などの関係者と一般の人々が協力することによってのみ、「良い終わり」を実現できるのではないかと言うことです。

会場からの質問から：（参加者へ広報のために、ほぼ全文を紹介します）

Q お二人が元気になれる言葉は？

内藤 先生に会えて良かったと言われる時ですね。望んでもそうならない中でご縁でつながった訳ですし、その家族や患者さんと時間を共にして、どんな苦勞をしても、こちら良かったと思えます。

柏木 こういうことが嬉しかったと言われると元気がでますね。事例では、看取りの時に娘さんが号泣され、思わず私も貰い泣きをしましたが、後日に親戚の方から手紙で、あの場で嬉しく思いましたと書かれていました。このようなポジティブフィードバックで、力が与えられます。

Q がんと宣告されるとしたら、どんな心の準備をしたらよいでしょうか？

内藤 専門医でなくても、きちんと相談できる医師を確保してほしい。困ったことを率直に相談できる、人生の友とでも言うような方がいれば心強いです。色々な筋道がちゃんとありますから、孤独にならないことです。

柏木 第一に慌てないことです。それと第二に治るかもしれないと考えることでしょうか。実際に進行していても最近の治療は、かなり回復を期待できる状況ですから。その先の治らない状況でも、まず慌てないことです。

内藤 それと、在宅ケアなどは元気な時に、情報を得ておくことが大事です。がんはとてもパニックになりやすい実情ですから、普段からこのような講演会など知識を得て、それが本当の心の準備ではないでしょうか。

Q 身寄りがいない場合、どのように相談相手を見つけられますか？

内藤 あらかじめ自分の意思を、今の付き合いの方に告げておかれることでしょうかね。今言われている寝込まないための体の健康老人の条件に加えて、仲間力と行く末をしっかりと考える勇気の力を入れて、それで幸せの要素を盛り込む必要があるでしょうね。

Q 動画で示された87歳の神経難病の女性は、生きていく意味をどこに置いておられるのでしょうか？



内藤 一言で言えば自律されておられると思います。物質的には恵まれない中で、自分の人生をきちっと生きている。見守る側からは、ハラハラの時もありますが、死を怖れてもいません。この方を無事送ることが私達の使命だと考えさせるような、それこそ尊敬する女（ひと）だと思います。

Q 私がもし自宅で死んだとすると、その部屋で亡くなったと家族が気にするのではないのでしょうか。そう思うと最期は家と言いだせないのですが。

内藤 死を忌み嫌う雰囲気は家族と本人にあるのなら、家で無理をしなくても心通う医療者が居る施設で助けを得る道はあると思います。ただ人生のいのちの終わりを皆で見つめてゆくと、死の恐怖は薄れてゆくと在宅の現場では実感しています。

Q 子育て中ですが、次の世代にも、いのちの縁を伝えてゆくためには、どんなメッセージを送ったらいいのでしょうか？

柏木 それは死の教育（デス・エデュケーション）に関することだと思いますが、日本では学校教育の中でも触れられない部分です。それが子育ての中で急にとりあげてもつらいですね。私が米国で40年ほど前に経験したことですが、小学校4年の教科書に人間もペットも同じように死ぬことは避けられないと書いてありました。セックスと死は共に教育しにくい問題ですが、今では性教育は少しずつ前進しています。死の教育も同じく進めてほしいと思います。

内藤 私は同居していても家族の中でのお年寄りの孤独を考えてほしいと思います。ペットに対する家族の声のやさしさの百分の一でも、お年寄りに向けてほしいと思います。お年寄りも家族の一員として「無視をしない」、それがいのちの教育の第一歩かなと思います。

Q 死に方としてポックリと、誰の世話にもならず死にたいのですが。
柏木 昨日の研修でも言いましたが、自分の死に方をこうしたいと選べません。まあどこかで開き直っておくのが健全と思います。違う言い方で言えば、神様は私に一番好い死に方を備えてくださっていると信じて、最期まで生きるというのでしょうかね。

今後のいせの会の課題

今回、勇美記念財団の助成を受けて、一般市民向けに開催をさせていただきました。当日、財団の住野勇さま御夫妻にも参加拝聴いただいたこともありがたいことでした。

柏木先生と内藤先生が、前回の機会にも増して熱く語りかけられた言葉の一つ一つを、大事に繰り返し考えています。特に「医療・看護・福祉と宗教などの関係者と一般の人々が協力することによってのみ、『良い終わり』を実現できるのではないかとのメッセージを贈られて、私共の「終わりよければ」いせの会の存在意義を、ふたたび噛み締めたように思います。今まででも必要を感じていた会の事業の、ひとつひとつの課題が見えてきましたので、その点を確認して、この報告書をまとめさせていただきます。

1. 定期的な市民の意見交換の場を提供します（定期的な例会・懇談会など）
身近な場所で、生と死、いのちをめぐる話題を継続的に話し合う機会を作りたいと思います。既存の会合に出向く活動も必要でしょう。
2. 医療やケアの地域情報を市民に還元します（ハンドブックの作成）
この地域での在宅ケアや緩和ケアと、どのようにしたら接点を持てるかと、分かる資料をまず準備しようと思います。他の地域での市民活動と交流の機会を持つことで、具体的課題を整理しないと本当の力にできません。
3. 市民向けの勉強会や講演会などを催す軸となります
医療機関主催の全般的な医療知識の公開講座などがありますが、最期の生き方に触れるような勉強会や講演会は、まだまだ少ないと思われます。
4. 世代を超えた「死の教育」の場をよびかけます（学校・老人会）
単なる健康教育を超えた、いのちの教育の内容を求めてゆきましょう。
5. 市民のための緩和ケアの充実をよびかけます
（日赤緩和ケア病棟発足に向けて）
地域で亡くなることを支えるためには、在宅ケアとの連携をもっと考えることや、他の病院でも緩和ケア病棟を立ち上げる事を求める活動が必要に思われます。伊勢市の緩和ケアに対する施策を求めてゆきましょう。市立伊勢総合病院の今後の在り方検討にも、緩和ケアの視点が必要に思われます。

市民の中でホスピスのこころを語ろう

「いのちの対話」ふたたび



柏木 哲夫 先生
金城学院大学学長



内藤 いづみ 先生
ふじ内科クリニック院長

日時 平成22年8月1日(日)

13:30~16:30 (開場 12:30)

会場 伊勢市 神宮会館 大講堂

三重県伊勢市中之切町152 TEL0596-22-0001

定員 500名(往復はがき先着順)締め切り 6月30日

空席が残る場合のみ、当日参加可能となります。

申込方法は裏面をご覧ください。

参加費 500円(当日払い)

主催 / 「終わりよければ」いせの会

後援 / 伊勢市、伊勢地区医師会、三重県看護協会、

みえ生と死を考える市民の会、南勢地域緩和ケアネットワーク

この企画は、在宅医療助成
勇美記念財団の公募援助を
受けて実施しています。

いせの会 問い合わせ先 TEL:0596-63-5226 FAX:0596-63-5236

あの感動をもう一度！ 2009年11月に名古屋で開催した死の臨床研究会の企画：柏木哲夫先生と内藤いづみ先生の対談「いのちについて語りたい」、会場は立ち見や座り込みの聴衆で埋め尽くされました。「生命から いのちへ…」 病院の医療にあずけっぱなしだった私達の「いのち」を私達自身の手に取り戻すためにどうすればいいのか、今度は魂のふるさと伊勢の地で考えてみませんか？

最期は住み慣れた我が家で
気兼ねなく過ごしたい

自分のことは
自分で決めたい

「いのち」をめぐる様々な思い

家族に負担をかけたくない

世話になった皆に感謝の
気持ちを伝えておきたい

ともかく苦しまずに逝きたい

ホスピスを日本に根付かせる

柏木哲夫先生のご著書

「癒しのユーモア」(三輪書店)、「癒しのターミナルケア」(最新医学社)、「ベッドサイドのユーモア学」(メディカ出版)、「定本ホスピス・緩和ケア」(青海社)、「人生の実力」(幻冬舎)、「家族の実力」(幻冬舎)、「いのちに寄り添う」(KKベストセラーズ)など。

在宅で生きる事を伝える

内藤いづみ先生のご著書

「最高に幸せな生き方と死の迎え方」(オフィスエム)、「あなたを家で看取りたい」(ビジネス社)、「あなたがいてくれる」(佼成出版社)、「『いのち』の話がしたい」(佼成出版社) 絵本「幸せの13粒」(オフィスエム)、米沢慧先生との往復書簡「いのちのレッスン」(雲母書房)

※ 手話通訳、要約筆記のご希望があれば、はがきに書いて下さい

申し込み方法

往復はがきの
書き方の見本

往復はがきに 8月1日参加申込み とお書きいただき、参加ご希望の方のお名前、年齢、性別、住所、電話番号、FAX 番号(もしあれば)をお書き添えの上、下記の宛先にお送りください。(なお、複数お申込みの場合には、希望者全員のお名前と年齢、性別をお書きください。)
お申し込みの方には、受付完了の通知と入場予約券を兼ねた返信葉書をお送りします。もし10日間過ぎても返信の葉書が届かない場合には、TELまたはFAXでお問い合わせください。

申込先(往復はがきの往信の宛名面に記載)
〒516-0805 伊勢市御園町高向927 「終わりよければ」いせの会 宛

<input type="checkbox"/> 返信	「自分の宛名」	8月1日参加申込	氏名 年齢 性別 住所 電話 FAX
-----------------------------	---------	----------	-----------------------------------

<input type="checkbox"/> 往信	「終わりよければ」いせの会	伊勢市御園町 高向927	空白で
-----------------------------	---------------	-----------------	-----

※なお、前日(7月31日)の夕方よりプレ研修会(柏木先生のご講演)があります。宿泊の上での五十鈴川の禊ぎ、内宮の早朝参拝などオプション企画も。先着百名、詳しくは別の案内チラシで。